

春夏秋冬 台湾徒然

第38回

「印傭」

柳本通彦

日曜の午後、大安公園を歩いていたら、驚いた。出会う人のほとんどがインドネシア人なのである。台北市の中心にある、およそ200メートル四方の広い敷地だが、まるでジャカルタの独立広場にでもいるような錯覚を催す。特別な行事でもあったのかもしれないが、これだけのインドネシア人がこの街で暮らしていることを再認識した。

そういえば、我が家のマンションの中庭で日中、子供や年寄りを連れて日向ぼっこをしている若い女性もインドネシアの人が多い。かつてフィリピンのメイドさんが目立ったが、最近では介護という名目でインドネシアの人を雇う家庭が急増しているのだという。

台湾では、「印傭」(印はインドネシアの略)の二文字で表現される。「印傭が逃げた」「うちの印傭は計算ができて

ない」「印傭が肺結核になった」という具合である。もちろんほかに工場労働者も多数存在する。

先日の新聞には、こんな記事もあった。ジャワからお嫁にきた女性が、一日10時間以上の労働を強いられ、ろくろく給料ももらっていないかったという。「結婚」が、奴隷労働の隠れ蓑になっているケースもあるということである。

先日、初めてジャカルタに行った。いったい彼らの故郷はどうなっているのか、その背景の一端を知るべく、友人のつてをたどって、華僑の経営する工場を訪ねてみた。ジャカルタ近郊にたつ縫製工場である。

いくつかの工程ごとに分割された部屋に入ると、異様である。ミシンやハサミを操る音以外まったくシンとしている。私のような異邦人が入っても、



ジャワ華僑経営の工場で作業する少女たち

眼をやる人もいない。ノルマに追われているのか、手を休めることなく、単調な作業を延々と続けている。これは野麦峠だと思つた。

全員住み込みという約200人の工員は、ジャワ島中部出身者。近所の人たちは雇わない方針だという社長は、労働者同士が仲良くなったり、団結することを恐れている。朝7時半から5時まで、ときに9時頃まで残業がある。広々とした社長室に入ってコーヒーを勧められる。部屋には十数台のテレビモニターが組み立てられている。社長はここで監視しているわけだ。彼の自宅にも行った。ジャカルタ中心部の豪邸に車が数台並び、子供たちはみな留学経験があつた。

外国どころか、他の島にすら行ったことがない少女たちが、はるばる台湾人の家庭にやってきて、メイドとして働いていることに、いささかの感傷を覚えていたのだが、彼らの故郷には、どんなリスクを越えてもやってこざるをえない現実があつた。

ジャカルタ国際空港から台北への直航便。イミグレーションを過ぎて、待合室に進むと、通路が二つに分かれている。一方は、土産物をもつた各国人が歓談するごく普通の風景。もう一方の部屋は、おそろいのゼッケンを着たジャワ人の一群が占めていた。

ここでも彼らはほとんど言葉を交わすことなく、じつと椅子に座り込んでいる。これから海外に出るという華やぎはまったくない。毎日1便飛ぶ中華航空機の機内の半数が実はこうした出稼ぎの人たちで埋められており、機内でもはつきりと座席は区分されている。彼らにはこれから、予想もつかない孤独な3年間が待っているのである。

やなぎもと・みちひこ
京都市生まれ。99年度「潮賢」ノンフィクション部
門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの
聖戦」(現代書館)「台湾革命」(集英社新書)「明治
の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新刊に「ノ
ンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」
(かわさき市民アカデミー出版部)